

特集

きずなシンポジウム

新たな「小地域ネットワーク活動推進事業」の展開



大切なのは

「実践」と「連携」

6月21日（土）、登別市民会館中ホールにて、「きずなシンポジウム」を開催しました。

今回のシンポジウムでは、一昨年の大規模停電による教訓と「地域の支え合い活動に関するアンケート」及び「町内会福祉活動実態調査」の結果を踏まえ、新たな小地域ネットワーク活動推進事業の展開を考えることを目的に、北星学園大学社会学部福祉計画学科教授の岡田直人氏による講演と、3名の方からの実践報告を行いました。



アンケート調査

結果報告!!

地域の支え合い活動の視点
「新たな仕組みづくりから考える」



北星学園大学 社会学部福祉学部 福祉計画学科

教授 岡田直人氏

見守り実施町内会は強い!!

見守り活動を行っている町内会の多くが、サロン活動、防災・防犯パトロール、空き家対策、町内会会報を作成しているということが判明しました。福祉定例会を通じて、緊急時の連絡表整備や助け合いチーム等のグループ形成を行うことで見守り活動を実施するための体制が構築されているのでしょう。

また、調査結果から防災・防犯および交通安全パトロールを実施するなど、町内会のフットワークの良さや会報作成を行い、地域の情報を伝え合う熱意や意識の高まりに、見守り活動の実施を取り巻く町内会の持つ強さを感じ取ることができました。

小地域ネットワーク活動とは…?

“誰もが安心して暮らすための、住民同士の支え合い・助け合い活動”です。
日常的な声かけ・見守り活動や、住民と専門機関の連携により一人ひとりを支える仕組み作りを行っています。

アンケート 結果の point!



Q.地域支え合い活動上の困り事は?

見守り活動を	回答が多かった項目
行っている方	これからも続けていかなければならないのが不安
行っていない方	どのように活動していいかわからない

Q.地域支え合い活動に期待する事は?

1. 情報を共有し合える場づくりの支援
2. 専門機関との調整や連携
3. ふれあいサロン活動などの支援

見守り活動がまだ十分ではない町内会においては、役員や関係者がサロンなどに参加して顔なじみをつくることや、情報を共有しながら福祉活動を行うことにより、日ごろの地域ネットワーク活動を充実させ、災害時の安否確認にも活かせるようになることが期待されます。

実施する前に多くの問題があるから行えないと言わずに、まずはやってみることが大切です。質にこだわらず実践していく中でノウハウをつかみ、そのあとから必要なことを検討していき、できそうなところから活動の内容を充実させていくとよいのではないのでしょうか。

まずは行動から

町内会と専門機関の仲介役を

見守り活動の実施や検討を専門職や機関と連携していけば、活動が容易になると期待されますが、その際には、両者をつなぐコーディネーターの存在がきわめて重要です。

町内会の組織と登別市の福祉の専門職・機関が出会う機会を設けるにも、両者を引き合わせる調整をする人が決められていないのが現状です。関係者を引き合わせると地域の支え合いが、町内会や専門職だけである必要もないので、それぞれが得意なところを生かして負担を軽くしていくことができます。2つが結びつくことで、おもしろい活動ができるのではないのでしょうか。



シンポジウム

「一人ひとりの命を守る世帯把握と情報伝達の課題と成果」

世帯把握と情報伝達のあり方

鷺別6丁目町内会

会長 川島 芳治氏



町内会全体の約43%が高齢者のため、災害弱者名簿を作成して、各役員に配布し把握してもらっています。地域包括支援センター等とも連携し情報を共有していれば、早い段階で対応ができます。



町内会と民生委員の連携の工夫

中央西地区民生委員
児童委員協議会

会長 太田 通氏



町内会であった事例から情報を把握し、活用しながら行う見守り活動、町内会役員と民生委員との懇談会の開催、町内会での配布物の一部を民生委員で受け持つことなどを行っています。今後も工夫しながら活動を推進したい。



専門機関と町内会の 連携の課題と可能性

登別市地域包括
支援センターけいあい

センター長 西島 智恵氏



福祉サービスを利用することにより、地域の支援者が遠のいてしまうことが課題です。元気なうちから地域や専門機関とつながる意識を持つことで、専門機関に早期連絡する仕組みづくりや、支援を必要とする人が再び地域とのつながりを取り戻せることにつながると思います。

